

グローバル人材教育と英語ヒエラルキー —高校英語教科書の批判的分析を通して見えてくるもの—

長 谷 尚 弥

近年、言語や言語教育の意味合いが変化してきていると感じる。国連による先住民言語重視の動き（International Decade of Indigenous Languages: IDIL 2022-2032）、そしてアメリカ応用言語学会（American Association for Applied Linguistics）がその動きに同調し、広く世界の応用言語学者に対して先住民の言語やその使用者に対する意識を高め、理解を深めるように促している。以前にも増して言語が、単なるコミュニケーションのツール以上の意味合いを持つようになってきたと感じる。これからの言語教育はどのように考えたらいいのか。言語や言語（外国語）教育における多様性や平等性、権力、そして社会正義をどう考えたらいいのか。このシンポジウムでは世界の様々な外国語教育の理念や実践を参考に、高校英語教科書を批判的に分析することで、英語ヒエラルキーを含めた、グローバル時代における日本の英語教育の問題点を考えた。

アメリカバイリンガル教育、欧州言語教育政策、国際英語論、批判的応用言語学の知見から得られる外国語教育のキーワードは、「言語や言語教育における多様性と平等性」、「国際英語論の主張する英語の多様性」、「欧州言語教育政策に依拠した複言語主義」、そして「言語における権力と社会正義・公平・公正」である。以上の観点から高校英語教科書を批判的に分析した結果、その記述において、文化多様性や言語多様性に対する認識、世界の多様な英語に対する認識、英語能力に対する認識（部分的能力に対する肯定的な見方）等に関して改善の余地があることがわかった。日本における英語教育の目的として異文化理解・国際理解を標榜するなら、教科書に文化や言語の多様性を持たせることは必須である。また、現在、英語を母語とする人口よりもはるかに多くの人々が英語を第二言語・外国語として使用しており、そこにはそれぞれの地域性や文化を反映した実に様々な英語のバリエーションが存在する。これからの英語教育を考えると、このような英語の持つ多様性を念頭に置くことは重要である。そして、さらに大きな視野で考えると、世界中には様々な言語が存在する。私たちはつい話者数が多く、通用性が高い言語に注目しがちであるが、その話者数やその言語の持つパワーに関係なく、上述したような、言語の持つコミュニケーションのツール以上の意味合いにおいてどの言語もその価値は変わらない。すべての言語は私たちを私たちたらしめるものであり、社会に公平・公正・社会正義をもたらさうものである。これからの時代にあって、言語や言語教育に携わるものはもちろん、外国語を学ぶ私たちは皆、そのことを忘れてはならない。

